

20

単細胞緑藻クロレラブルガリス CK-5 株 (CVP) の経口投与によるストレス潰瘍予防作用

○菅野敏博、田中邦明、丸山功、隈本正一郎、安藤洋太郎 (クロレラ工業株)、野本亀久雄 (九大名誉教授)

〔目的〕日本では諸外国に比べて食環境に起因する消化性潰瘍の発生が多い。近年は潰瘍治療にはまずヒスタミン H₂ ブロッカーを選択するケースが多く、短期的な改善は見られるが、再発の予防が問題点である。最近の神経・内分泌系と免疫系の相互作用についての研究から、潰瘍の発生にも免疫にかかわりの深い因子が関係していることがわかってきた。クロレラブルガリス CK 株は免疫系を賦活させることから、潰瘍治療の補完に働く可能性を検討した。

〔方法〕あらかじめ CVP を経口投与したラットに、常法により Shay 潰瘍あるいは水浸拘束ストレス潰瘍、アスピリン潰瘍、ヒスタミン潰瘍、システアミン十二指腸潰瘍、酢酸潰瘍を作成し、CVP による潰瘍の発生予防作用を潰瘍指数や穿孔の状態を指標として検討した。

〔成績〕潰瘍形成を防御する因子の増強作用を示す薬剤に対して感受性とされるストレス潰瘍モデルでは CVP は潰瘍形成を強く抑制するとともに、同様に Shay 潰瘍およびシステアミン十二指腸潰瘍モデルにおいても、用量依存的に潰瘍形成を抑制した。一方、攻撃因子 (潰瘍を形成する因子) を抑制する薬剤に感受性とされるヒスタミン潰瘍モデルにおいては、効果を示さず、両方の因子に作用する薬剤に感受性とされるアスピリン潰瘍および酢酸潰瘍モデルにおいては弱い効果を示した。

〔結論〕以上、CVP は経口投与で生体内の潰瘍形成を防御する因子の働きを増強することにより、潰瘍形成を防止することから、ヒスタミン H₂ ブロッカーなどの薬剤による消化性潰瘍治療を補完するものと考えられる。また、CVP を常時飲用することにより、現在の社会問題のひとつであるストレス潰瘍の発生防止が期待される。